

## 博士論文概要

## 中国厦門市・鼓浪嶼における観光地化に関する研究

呉 晨峰

本研究では、現代中国における急激な地域変化の主要な要因として旧市街の観光地化を取り上げ、都市域における旧市街の観光地化の進展と地域変化の具体的状況について時空間的に分析し、とくに歴史的建造物を利用した観光関連施設の変化に注目して、観光地化のプロセスと地域変化の関連性を明らかにした。さらに観光地化による都市地域の発展の役割や、歴史的建造物をはじめとする地域内の建造物の観光活用、地域内および地域間における人口流動について着眼した。鼓浪嶼では、観光資源の存在、行政主導の役割、民間の積極的参画、歴史風貌建築の活用、交通拠点都市・厦門市の地理的条件など、観光地化に関わる発展条件が備わり、官民による土地・交通・産業・観光対象の開発などが展開しながら全域観光地の確立に至り、とくに2009年を境に地域には大きな変化が生じたことが明らかになった。観光地化の進展によって、鼓浪嶼は静態的な歴史的町並みから動態的な「観光の島」へと転換し、その過程において日帰り観光地から宿泊観光地へと性格を変化させてきたことに特色がある。そのなか、地域の核心的な観光資源である歴史風貌建築はとくに重要な役割を果たした。旧市街地を特徴づける歴史風貌建築は官民による開発／保護の主要な対象となり、積極的な観光利用をとおして観光地化の進展を支え、新たな雇用基盤となることで観光業に関連する地域住民の転出入を促進した。

キーワード：観光地化、旧市街（旧城）、家庭旅館、鼓浪嶼、厦門市

## 1. 序論

## (1) 既存研究と研究の背景

1978年の改革開放以降、中国は急速な経済発展を遂げるとともに、都市化の進展が加速している。なかでも優遇政策を受けた沿岸部を中心に都市化が進展し、都市に関わる観光業は目ざましい発展を遂げている。2009年、国務院は『観光業発展の加速に関する意見』を發布し、観光産業が国民経済の基幹産業に位置づけられると、鉄道、航空、ホテルなどのインフラ整備も観光業の発展に拍車をかけ、いわゆる「市民遊客化、遊客市民化」が指摘されるようになった（厦門大学編、2011）。つまり中国では、観光業と都市開発との相乗効果がより顕著になりつつある。

その一方で、中国では改革開放以降の急速な経済発展が、生活水準向上の名の下に都市旧市街の景観を一変させてきたことも確かであり、従来都

市の中心であった旧市街では、インフラの不備や環境悪化などの問題もますます顕在化している。中国政府の都市再開発事業の推進にともなって、旧市街では大規模な建設活動によって歴史的建造物が減少したことから、都市再開発に際した歴史文化遺産や旧市街における保護・活用への課題が指摘されている（徐、2004；王、2006）。

さらに近年では、歴史ある都市の旧市街（旧城）は、風情と地域的特色に彩られる場所として、中国都市において観光の主要な核心と位置づけられている。各都市の旧市街ではその古い街並みが観光対象となり、とくに観光地として整備される事例が多く、多くの先行研究によっても報告されている。例えば、北京旧市街（魏、2011）、天津五大道（王、2013）、上海外灘（張、2012）、広州旧市街（呉、2008）などが挙げられる。

以上のように、改革開放以降の中国における都市では都市再開発、観光産業の成長、歴史文化遺産

産に対する保護・活用など、さまざまな社会現象が顕在化しつつあり、とりわけ都市の旧市街はその中心舞台となっている。そのため、本研究では中国都市の旧市街における観光地化をこれらの相互関係のなかに位置づけ、社会動向とともに変化する動態的な側面に着目した。

## (2) 研究の目的

本研究では現代中国における急激な地域変化の主要な要因として旧市街の観光地化を取り上げ、都市域における旧市街の観光地化の進展と地域変化の具体的状況について時空間的に分析し、とくに歴史的建造物を利用した観光関連施設の変化に注目して、観光地化のプロセスと地域変化の関連性を明らかにした。さらに観光地化による都市地域の発展の役割や、歴史的建造物をはじめとする地域内の建造物の観光活用、地域内および地域間における人口流動について着眼することとした。

## (3) 研究の手続き

本研究は、中国廈門市の鼓浪嶼（コロンス島）を対象に、観光地化の進展とともに生じる旧市街の地域変化を空間的に明らかにすることを目的とした。研究の視点としては、鼓浪嶼における観光地化の過程を保養地期、観光地形成期、観光地確立期に時期区分してそれぞれの特徴を明らかにし、そのうちとくに観光地形成期と観光地確立期に着目した。また、時系列的な傾向を把握する目的から、鼓浪嶼の観光地化の過程における政府の開発事業、地域の観光対象の変化の過程を明らかにして観光年表を作成し、商業店舗や宿泊施設の従事者および観光客と住民に対しては独自の聞き取り調査を行った。さらに、歴史的建造物の観光利用の実態把握にも努めた。こうした総合的な現地調査を実施することによって、鼓浪嶼の観光地としての特徴や機能の変化およびその要因などを具体的かつ空間的にとらえ、鼓浪嶼における観光地化の進展とともに生じる旧市街の地域変化について考察した。

本研究の特徴は、全島が旧市街と位置づけられる廈門市の鼓浪嶼に、経済発展にともなって押し寄せた観光地化の波を精緻に捉え、観光地化の進展とともに生じた旧市街の地域変化を、土地利用と施設（用途）、基幹産業、開発と保護、地域住民の5つの指標に着目することによって実証的に明らかにしたことにある。中国ではデータの入手

に制約があることから、本研究をとおして、これまで蓄積が進んでこなかったミクロスケールの観光研究に新たな知見を付け加えることを企図した。

## 2. 廈門市・鼓浪嶼における地理的性格と歴史的背景

福建省沿岸部では、南北を珠江デルタと長江デルタにそれぞれ接し、福州から莆田、泉州、廈門、漳州に至る一列の都市群は、「福建沿岸拡大大都市地域」とも称され、長江デルタと珠江デルタを直結する回廊としてベルト地帯を形成し、海峡東岸に当たる台湾との緊密な経済交流圏の形成に期待が寄せられている。この開放性の象徴としての廈門市は、1842年の南京条約によって開港した福建省を代表する港湾都市である。

交通の側面からみると、従来の福厦高速道路（福州－廈門）は、瀋海高速道路（瀋陽－海口）の一部として大陸沿岸部を南北に結びつける自動車交通の大動脈に組み込まれている。また「海西」<sup>1)</sup>の一環として、これまで鉄道交通の空白地帯であった南東沿岸部には、2010年に福厦高速鉄道（福州－廈門）が開業し、これが温福高速鉄道（温州－福州）とも接続して最高時速250 km/hでの営業運転が実現した。さらに2013年に厦深高速鉄道（廈門－深圳）の開業によって広東省・深圳市と結ばれ、時間距離が大幅に短縮された。

廈門市の南西部に位置する鼓浪嶼は、廈門観光の核心地区として成長を続けており、訪問する観光客数は1981年の65.7万から2015年の1,021万へと飛躍的に増加している。島内には、洋館、教会、別荘、伝統民家など、さまざまな建築様式を取り入れた建築が多く残存し、自動車の通行が禁止されている。1988年に国レベルの国立公園（＝国家級風景名勝区）に指定されると、2007年には国5Aレベルの観光地、2015年には第1期の国レベル歴史文化観光地（＝歴史文化街区）に選定され、2017年には「鼓浪嶼：歴史的共同租界」としてUNESCO世界文化遺産に登録された。

鼓浪嶼は、廈門市が開港地となったことで西洋植民者、華人華僑、地域住民の居住する住宅街となり、農漁村から市街地へと転換した。とくに、1840年から1902年にかけては、領事館をはじめ

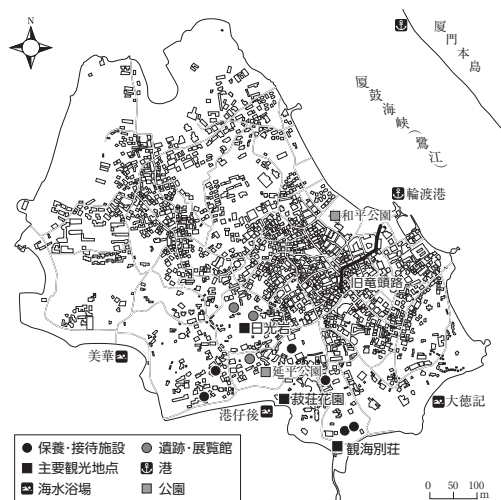


図1 鼓浪嶼における観光対象の分布  
(保養地期：1949-1977年)

当時発行の『厦門日報』および現地調査により作成

とする行政機関および宗教、教育、医療などの公共施設が多く建設された。さらに、1902年から1941年までの共同租界地期では、工部局によって公共機関がさらに整備され、その後は華人華僑の間で別荘建設が流行した。こうして多岐にわたる様式の建築（計1041棟）が建設された。

保養地期(1949年～1977年)においては、行政主導によって保養施設が設立され、海水浴場・展覧館・公園・道路などの観光施設が整備された。鼓浪嶼における観光施設は、南部の海水浴場の周辺に分布し、観光客はおもに保養を目的とした特権階級と廈門市民によって構成されていた(図1)。その後の1966年以降では、文化大革命による影響で廈門市民の観光形態が変化し、このことは結果として鼓浪嶼の保養地としての性格を強めることとなった。なお、この時期の基幹産業は工業と住民向けの商業であり、著しい観光地化の進展は確認されなかった。

### 3. 日帰り観光地・鼓浪嶼の形成

### (1) 鼓浪嶼における竜頭路の変遷と現状

竜頭路は旧竜頭路と新竜頭路によって構成される。竜頭路の範囲は港の広場を始点として、南西は音楽ホールまで、西端は旧自由市場および海壇路と泉州路の交差点まで、北は鼓新路と福州路の

交差点までである。全長は2,276 mで、道幅は3～5 mで、そのうち、旧竜頭路は幅5 m、全長約300 m、両側の建物の高さは約4.5 mである。かつて島内最大の住民生活集中地であった竜頭路は、共同租界時期の市街化によって生活住民向けの商店街となった。また、港と近接していることから、島内の最も重要な物流の集散地としてゲートウェイの役割を果たしてきた。付近には旧別荘や旧領事館、教会などの施設が立地し、保養地期から市民によって親しまれてきた。

1) 旧竜頭路の中心部 (1950 年)

1950年時点において、旧竜頭路中心部沿線の家屋総軒数は41を数えた。利用形態は売店13店、土産品店4店、飲食店1店、住宅15軒、公共施設6軒、工場2軒であった。総店舗数は18、個人店舗は、地域住民向けの織物や靴などの小売店や最寄り品店を中心とした、店舗による土地所有率は高く、家族経営によるものが多かった。このことから、保養地期初期の旧竜頭路中心部では、地域住民向けの生活機能に重心が置かれていた。

## 2) 旧竜頭路の中心部 (1970 年)

文化大革命期には個人営業は資本主義行為と見なされ、政府によって禁止された。このため鼓浪嶼では、個人営業による店舗営業が禁止されすべてが閉店した。1970年時点つまり保養地期の後期では、旧竜頭路中心部における44軒の家屋のうち店舗はわずか3軒（食糧配給所、郵便局、協同組合、いずれも国有店舗）を数えるのみであり、残りの41軒はすべて住宅として利用されていた。

### 3) 旧竜頭路の中心部 (2009 年)

2009年時点では、旧竜頭路中心部の家屋53軒のうち土産店が33軒を占め、これらのほとんどは2000年以降に開店した店舗であった。それに対して、公共施設、住宅、飲食、個人売店はとくに街路北側に均等に分布し、著しい分布傾向こそみられないものの多様な業種が高密度に商店街を形成している。

保養地期初期の1950年から2009年までの変化のうち、旧竜頭路中心部では観光土産品店の増加が顕著であり、これは竜頭路を訪れる観光客の規模に対応した結果である。一方、個人売店（最寄り品店）は減少、工場は姿を消して、住宅の多くは改築され、これらは観光客向けの商業施設に姿



を変えた。こうした旧竜頭路の中心部における家屋の利用形態の変化は、鼓浪嶼の観光地形成期の特徴であると考えられる。つまり、旧竜頭路の中心部は、かつての住民向けの街路から観光客向けの街路へと変化したことが確認された。

鼓浪嶼では1996年から開始された都市再開発を契機として土地利用が大きく変化し、ショッピングモールに代表されるように、竜頭路に立地する建造物の空間利用は立体化・大型化の傾向がみられた。その一方、街路沿線では2階が住宅として利用される例も少なくなく、2009年時点においては高層階の居住機能は部分的に維持されていた。

鼓浪嶼の経営者は外部出身者の割合が多く、島外の資本が鼓浪嶼へ流入してきたといえる。外部経営者の参入は2001年以降に急増しており、なかでも収入を目的として移住した安徽省を中心とする内陸部出身者の存在に特徴がある。また、2009年時点における店舗の標準的な閉店時間は、工芸品店が18時、土産品店が19時、飲食店が20時であり、この時点での鼓浪嶼では、日帰り観光地としての性格が強かったことが確認された。

加えて、改革開放以降に島外から流入した労働者の一部は、当座の生活のための出稼ぎ労働者であったが、観光地化にともなって積極的に観光産業に参入し、2009年現在では資本家とも呼べる存在になっている。また観光地化は、近年の地域経済の格差を背景として、経済発展途上地域の若年層による経済活動の活発な地域への流動を加速させたといえよう。

観光地化により、旧竜頭路の空間利用には大きな変化がみられた。旧竜頭路は、港に近接したゲートウェイとして機能するのみならず、現在では、観光商店街として観光客を集める役割も果たしている。すなわち、かつては地域住民向けの生活機能に重点が置かれていた旧竜頭路は、観光客向けの街路へと変容し、従来の住宅は土産品店や工芸品店、飲食店などとして利用されるようになっている。旧住民の外部への移住と外部人口の流入は鼓浪嶼の商業化に拍車をかけたともいえる。

## (2) 竜頭路の変遷にともなう鼓浪嶼における地域変化

### 1) 工場の転出

1995年以降、工場が相次いで島外へ転出した。

とくに4つの工場(旧厦門第3プラスチック工場、旧厦門ガラス工場、旧厦門造船工場鼓浪嶼工場、旧厦門電球工場)が転出した結果、200,000㎡もの土地が観光に転用され、その多くが公園と緑地として整備された。

### 2) 住宅の撤去

都市再開発による住宅撤去の目的は、観光客に建造物の魅力を伝え、地域文化を享受させることにあった。しかし、観光客を誘致するための住宅撤去は、従来の生活空間から地域住民の転出を促すことにつながった。

### 3) 公共施設の減少

地域住民の流出にしたがい、住民生活にとって不可欠な公共施設が厦門本島に移転した。1997年と2007年との比較によれば、病院は3件から0件、学校は6件から1件、に減少した。島内の人口変化は「人口減少→公共施設移出→人口再減少」という悪循環をたどっている。

### 4) 地域住民の転出と外来人口の転入

工場の転出と住宅の撤去、公共施設の減少がもたらした結果は、鼓浪嶼の人口高齢化と地域空洞化であった。1950年に約20,000人を数えた住民の数は、2007年の14,327人にまで減少し、そのうち外来人口は6,161人で常住人口の43.3%を占めている。また、60歳以上の高齢者が4,000人以上(常住人口の28%)を占めるなど、鼓浪嶼の人口構造は大きく変化した。さらには旧住民のうち、学歴や所得の高い人々は続々と島外へ移り住み、所得の低い旧住民や外部からの流入者には古びた建物だけが残された。

## 4. 滞在型観光地・鼓浪嶼の形成

### (1) 鼓浪嶼における家庭旅館業の展開過程

#### 1) 1984-2008年

図2は、鼓浪嶼の宿泊施設を対象として開業年別の分布を示したものである。後述するように、本研究で分析した家庭旅館(Gulangyu Homtel)は、鼓浪嶼における宿泊施設の中心をなしている。

1984年以降、地域住民による個人経営の「竜頭旅社」を嚆矢として、個人経営の宿泊施設が開業されてきた。鼓浪嶼における家庭旅館の展開に鍵を握ったのが、2006年の「娜雅・NAYA 珈琲

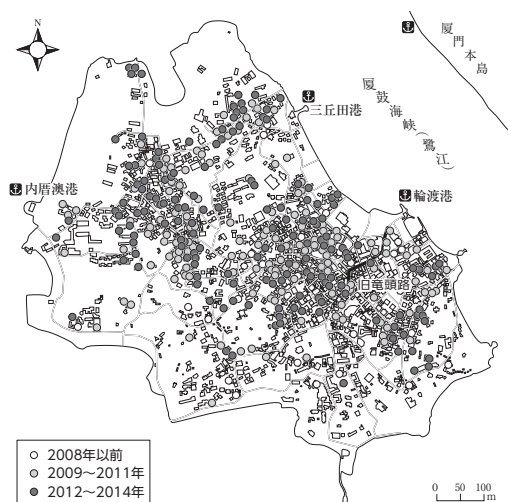


図2 鼓浪嶼における宿泊施設の開業年別分布  
2012～2014年の現地調査により作成

旅館」(旧ドイツ領事館を改造したもの)の開業である。その後の2008年には、わずか1年の間に15館の家庭旅館が開業した。鼓浪嶼の家庭旅館業は、観光市場の需要、政府の政策的後押し、歴史的建造物所有者による意向が合致して普及しはじめた。

## 2) 2009－2011年

2009年以降では、鼓浪嶼のUNESCO世界文化遺産への申請、高速鉄道の開通、「鼓浪嶼家庭旅館商家協会」の創設によって、家庭旅館業は大きく成長した。2009年には、計22館の家庭旅館(311客室)が新規開業、2010年と2011年には、それぞれ49館(636客室)と49館(616客室)が開業した。当該時期では、島の南東部の竜頭地区に55館が建設され、これらは輪渡港周辺のものと日光岩周辺のものに分けられる。一方、北西部の内厝澳地区にも47館が開業した。このことは2011年以降の内厝澳地区における急速な観光地化を促す一因と考えられ、この時期は従来の中心地区であった竜頭地区から内厝澳地区へと観光地区が拡大しはじめた時期に相当する。

この時期の家庭旅館の稼働率は75～80%で、一定のブランド効果が形成された。また、賃料が高騰した結果外部の投資者が増加し、特定の建造物を1棟まるごと増改築する例が増加した。宿泊客は国内の大都市からの個人観光客が多く、家庭

旅館の開業によって雇用が拡大し、政府の税収は増加した。さらに、例えば飲食業やクリーニング業など宿泊者の需要に応じて各種関連産業も成長し、飲食業の営業時間は日中から夜間へ拡大した。こうして鼓浪嶼の観光形態は、従来の日帰り観光から宿泊をとまなうものへと変化していった。

## 3) 2012－2014年

2012年には48館(550客室)、2013年には33館(396客室)、2014年には20館(233客室)の家庭旅館がそれぞれ開業した。増加ペースが比較的緩やかになった要因には、国内外の経済情勢の変化、内部の容量、厦門本島との競争、政府による規制の強化などがあげられる。この時期には、島南東部の竜頭地区に47館が開業し、竜頭地区の宿泊施設数はほぼ上限を迎えた。島北西部の内厝澳地区では44館が開業し、三丘田港および内厝澳の開港も追い風となって北西部の観光地化が進展した。

## (2) 鼓浪嶼における家庭旅館の特徴

### 1) 経営者

2008年以前では、鼓浪嶼出身の経営者が中心となって、外部の経営者がそれを補う構造がとられていた。しかし2009年以降では、外部出身の経営者が中心となり、鼓浪嶼出身の経営者がそれを補う構造へと次第に変化している。つまり、外部の民間資本が大量に鼓浪嶼に流入し、家庭旅館業に参入するようになっている。

### 2) 従業員

2014年時点で、鼓浪嶼における宿泊施設の従業員数は1,045人<sup>2)</sup>に達し、そのうち家庭旅館の従業員数は751人を占めている。これらはおもに以下の4類型に分けられる。

類型Aは管理職を務める店長であり、従業員全体の5%である。経営者の親戚、あるいは経営者の知り合いの紹介によって店長職を務めるようになった人が多い。そのため、経営者の出身地と関係をもつ場合が多く、とくに厦門市の出身者をもっとも多い。厦門市以外の出身者は経営者から提供された無料宿所<sup>3)</sup>に住む。勤務時間は日中で、おもに9時に出勤して18時に退勤する。

類型Bはフロントや送迎業務を担当する従業員であり、4類型のうち人数がもっとも多く、従業員全体の約50%を占める。出身地は大きく3つに分けられ、もっとも多いのは江西省、安徽省、

四川省など内陸部の出身者で、これに廈門市の近隣都市を中心とする福建省内の出身者、鼓浪嶼と廈門本島の出身者が続く。類型Bは経営者に提供された宿所や旅館内の1室に1人またはルームシェアによって居住し、勤務時間は夜間に及ぶ。

類型Cは清掃・洗濯業務を担当する従業員であり、従業員全体の約30%を占めている。出身地と現住所は、次の3つに分けられる。1つ目は、従来の内陸部の出稼ぎ労働者である。とくに安徽省から移住者が多く、鼓浪嶼および廈門本島に在住する。2つ目は、おもに廈門市近郊の出身者である。3つ目は、近隣都市を中心とする福建省内の出身者である。経営者から提供された鼓浪嶼の宿所に居住しており、勤務パターンは16時に家庭旅館を退勤後、島内の飲食店に移動して食事(まかない)を済ませ、17時-23時は食器洗い・清掃にあたるというものである。

類型Dは調理業務を担当する従業員であり、従業員全体の約15%を占めている。江蘇省、広東省、江西省、安徽省、四川省、湖南省、福建省内および東北地方の出身者が多くみられる。類型Bと同様に鼓浪嶼に居住している場合が多い。

以上のように、2009年以降の家庭旅館の急増によって全国各地とくに内陸部を中心とする地域から転入、定住したいいわゆる新流入者が従業員の中心となっており、近年の鼓浪嶼は「従業員の島」とも呼べる状況を呈している。つまり、鼓浪嶼では観光地化によって住民の入れ替わりが急速に進み、それぞれ内陸部と沿岸部、農村と都市、近隣都市と中心都市の間の激しい人口流動がこのことを可能にしている。

### 3) 建築保護区分

鼓浪嶼における家庭旅館は建築物の保護区分によって次の3つに区分できる。区分1は、重点保全歴史的建造物を改造した家庭旅館である。該当する家庭旅館は14館で、全244件の5.7%を占めている。区分1は重点保全建造物として家庭旅館に転用されたことから、建造物の外観、構造、平面的配置(間取り)、室内装飾への改変が禁止されるが、その他の建造物内部については内装の変更が許可される。この区分の家庭旅館はすべて「庭園あり+一戸建て」の建造物である。

区分2は、一般保全歴史的建造物を改造した家庭旅館である。該当する家庭旅館は70館で、全

244件の28.7%を占めている。区分2は一般保全建造物として家庭旅館に転用されたことから、建造物外観の変更が禁止されるが、建造物内部は基本構造の保持を前提として一定の改造が許可された。この区分の家庭旅館には、「庭園あり+一戸建て」が56館、「庭園なし」が10館、「庭園なし+商住混在」が4館ある。

区分3は、普通住宅を改造した家庭旅館である。該当する家庭旅館は160館で、全244件の65.6%を占めている。この区分の家庭旅館は、「庭園あり+一戸建て」が87館、「庭園なし」が60館、「庭園なし+商住混在」が13館ある。

### (3) 家庭旅館の区分別特徴(投資・改造・経営)と事例

#### 1) 「旧別荘」を改造した家庭旅館の事例

本研究の調査番号54は、1900年代に竜頭地区に建てられ、最初は教会所有の鼓浪嶼英華中学校の教員寮として利用された。その後の1930年代、ある漳州商人が教会から購入し、2007年まではその後継者と親戚が住んでいた。2007年に修復が開始されたが、歴史的建造物の保護政策によって中止された。2008年、鼓浪嶼の在来商人が不動産投資を目的に購入し、一旦は空き家となった。

30代の女性H氏は、廈門市郊外の同安区出身である。H氏は父(元建設業者)の影響で、1999年上海同済大学の建築デザイン学部を卒業、2006年までは上海で不動産会社に勤めていた。2008年の金融危機(リーマンショック)による臨時休暇で訪れた鼓浪嶼を気に入って、長期滞在を決意したという。2009年には上海での生活を引き上げて夫婦で50万円、親族から50万円の合計100万円(約1,530万円)を調達、仲介業者(在来の有力者)を通して、54番の物件を10年契約で賃貸し、父と公務員の夫から協力を得て家庭旅館に改造した。内部デザインには海、ビーチ、音楽、浪漫的な雰囲気など鼓浪嶼の観光要素を取り入れた。

2009年旅館開業以降、宿泊客以外の観光客に食事の提供をはじめたことをきっかけに、2010年に1階ホールと庭園を食堂に改造した。H氏の母が廈門料理「同安封肉」を提供したところ、客の口コミ効果やインターネット上の広告によって、多くの観光客で賑わう人気旅館となった。この成功を皮切りとして、2014年時点においてH氏は島内5つの家



庭旅館の経営に関わるまでになっている。

## 2) 普通住宅を改造した家庭旅館の事例

本研究の調査番号22は、1930年代に内厝澳地区に建てられた地域住民の住宅であった。2代目の所有者が定年後に1990年に廈門本島へと移住し、代わってその親戚のM氏（教師、1世帯）が入居した。現在家庭旅館を経営する50代の夫婦は、このM氏を通して、2010年に10年契約で賃貸した。改造のためM氏は移住を余儀なくされ、このため夫婦は賠償金8万（約123万円）を払った。

それまで福建省・寧徳市の工場労働者として勤めていた夫婦は1996年に廈門市へと移った。当初は廈門本島の中山路で衣料品店を経営していたが、鼓浪嶼に家賃の安い物件があること知り鼓浪嶼に住まいを選んだ。2000年以降、中山路では賃料の高騰とともに競合店舗が増加し、2008年に夫婦は衣料品店を閉店、すでに別の投資者が経営していた家庭旅館に投資した。2010年、夫婦は全財産100万円（約1,530万円）と親戚に借りた30万円（約461万円）を元手に、物件の賃貸契約を結んだ。夫婦は地主の許可を得て本館を従来の4部屋から8客室に増築し、さらに各客室にユニットバスを増設した。本館に隣接する空き地には別館（2階建て、5客室）と庭園を増設した。今後は家庭旅館経営によって老後のための貯蓄を続け、経済的基盤を固めたいという。

2009年以降では、鼓浪嶼の住宅、とくに「旧別荘」に関心が集まった。それらの希少性あるいは歴史的建造物への開発規制はむしろ家庭旅館への資本投下を呼び込むこととなり、滞在型の観光地化が推し進められた。また、高速鉄道の開通によって、家庭旅館の急速な発展を助長した。家庭旅館の経営は、新たな外部労働力の流入や従来の内部労働力の受け皿となった。その発展段階では家庭旅館の経営方式に変化が生じ、その中心は従来の地域的な「家族」経営から、現在では外部資本による「投資」経営が一般的になっている。

鼓浪嶼の家庭旅館は、島南東部の竜頭地区だけでなく、北西部の内厝澳地区にも波及して島全体を覆うようになり、観光・宿泊による土地利用状況を強調している。さらに、家庭旅館業の発展は、ほかの関連産業の発達も促しており、とくに飲食業、小売業、クリーニング業、運送業、仲介業、

金融業等各業種と緊密に連携しながら、宿泊産業を基幹とする観光地化が進んでいるといえる。

## (4) 家庭旅館業の発展にともなう鼓浪嶼の地域変化

以上から、観光地確立期においては、強力な保護体制を前提として、保養地期に建てられた旧別荘をはじめとする歴史的建造物の修繕・開放が進み、とくに民間の家庭旅館へと大量に転用されることによって観光利用率を大幅に上昇させたことが確認された。さらに、こうした観光地化が進展することによって旧住民が転出し、近年では所有権を持ちながら観光利用のために家屋を明け渡す旧別荘居住者も出現している。そして彼らの代わりに転入しているのが、上述したような家庭旅館の従業員をはじめとする観光従事者であることがわかった。

2008年までの鼓浪嶼は日帰り観光地にとどまっており、夜間の観光に関する経済的な安定性を欠いていた。また工場、学校、病院などの島外移転とともに地域住民が相次いで島外へと移住したため、老朽化の進む歴史的建造物をはじめ、地域住民の住宅などが「空」いた状態となった。しかし2009年以降、福建省沿岸部の高速鉄道を中心とする交通革新が進み、廈門市政府・鼓浪嶼観光管理委員会は市場拡大を求めて観光客の宿泊を企図するようになる。家庭旅館はこうした観光客のために「時間」と「空間」を提供する存在ともいえる。

鼓浪嶼には自然観光資源、海水浴場、観光施設が多く存在するが、この一角として歴史的建造物そのものや地域住民の住宅も家庭旅館として観光資源化された。また家庭旅館経営に必要な資金・労働力・物資は地区内または廈門本島から容易に調達でき、この点で経済特区における旧市街の一部としての特色が発揮されている。また家庭旅館の開設は、歴史地区で老朽化を待つのみだった歴史的建造物への懸念を解決することにつながった。

以上のように、宿泊観光地・「家庭旅館の島」の鼓浪嶼の形成の条件として、内的には、豊富な観光資源が存在すること、また家庭旅館経営に必要な労働力が確保できること、民間資本が調達できることが指摘できる。さらに、廈門市政府や鼓浪嶼観光管理委員会による行政の取り組み、民間資本の投資、家庭旅館商家協会の運営なども重要である。外的には、廈門市をとりまく交通革新が進み、空港や高速鉄道が観光媒介として機能した

ことをあげることができる。より根本的な条件としては、家庭旅館業が入り込む「空洞」が地域の構造のなかにあり、「空洞」を家庭旅館業で充足するのに必要な要素が存在したことである。

## 5. 鼓浪嶼における観光地化に関する考察および結論

### (1) 鼓浪嶼における観光地化の進展に関する考察

#### 1) 保養地期

中華人民共和国成立初期では、経済回復および都市発展が国の急務であった。鼓浪嶼では1956年の都市計画によって、保養地としての発展方針が定められ、観光地化の道を歩みはじめた。行政主導による保養施設の設立、海水浴場・展覧館・公園・道路などの観光施設が整備され、観光地としての体裁が整えられ、観光施設は、南部の海水浴場の周辺に集中した。当時の観光客は、おもに政治接待を目的とした特権階級と、海水浴を楽しむ厦門市民などである。工業や住民向けの商業は依然として鼓浪嶼の基幹産業であった。

#### 2) 観光地形成期（日帰り観光地）

1978年に改革開放が実施され、1980年に厦門市

は経済特区に指定された。1982年の都市計画によって、鼓浪嶼は保養地から経済特区における重要な観光地に昇格した。この時期には観光地点の管理部門が設立され、行政主導で有料観光施設が開業するなど、観光業は鼓浪嶼の新興産業となった。当時の観光客は、厦門市および近隣都市の市民と、厦門市を訪れるビジネス客であり、観光業の従事者はおもに従来からの地域住民であった。

1992年以降、中国は計画経済から市場経済へと転換した。同年、国务院は『第三次産業の加速発展に関する決定』を公表した。激しい観光地間の競合に直面した厦門市は、鼓浪嶼の経済発展の中心を観光業へと変更した。1995年の国家級風景名勝区総合計画によって、従来の土地利用は観光用地へと転用され、官民主導によって、人文観光資源の開発にも力が注がれた。一方、工場の転出や住宅制度改革が実施され、多くの地域住民が転出した。それに対して、内陸と沿岸部の経済格差の拡大や労働力確保の必要性、廉価な家賃などの条件によって、内陸部からの出稼ぎ労働者が新住民として鼓浪嶼に流入しはじめた。

2000年以降では、経済の急成長と国民休暇制度の実施が国内旅行ブームの引き金となり、国家

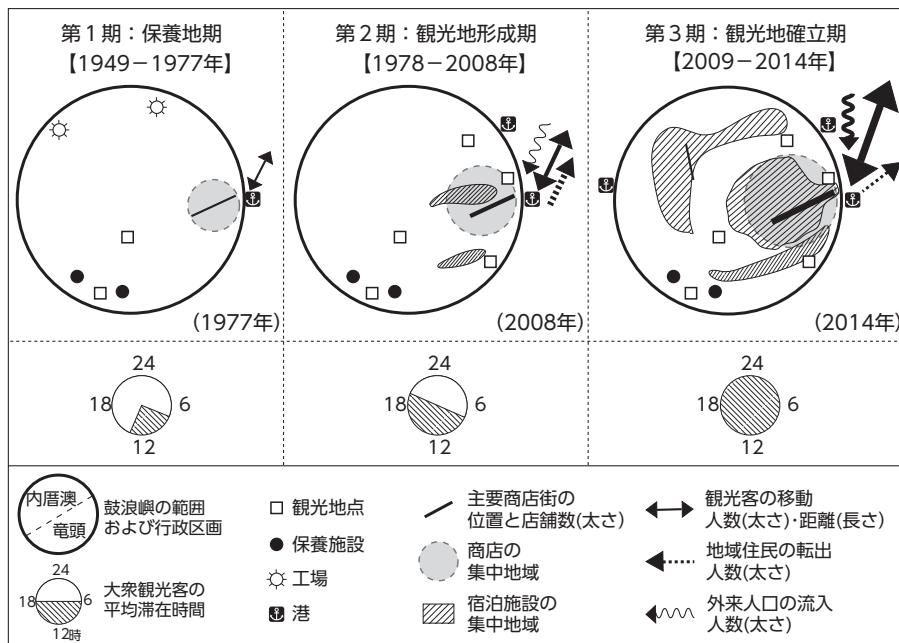


図3 鼓浪嶼における観光地化の模式図（現地調査により作成）



5A級景勝地を目指した鼓浪嶼の観光地化は加速した。観光専門管理機関が設立され、『廈門市鼓浪嶼歴史風貌建築保護条例』が公表されるなど、官民主導で一部の歴史風貌建築が博物館・展覧館に活用される一方、民間による観光客向けの商店が急増し、竜頭路を中心に島全体に拡散する傾向にあった。このなか、いくつかの住宅が宿泊施設として転用される例もみられるようになった。観光業は鼓浪嶼の主要産業となり、2008年の年間入込客数は500万に達して、鼓浪嶼は成熟した日帰り観光地として成長した。一方、行政区の合併や住宅の撤去、「休眠期」政策の実施、公共施設の転出などによって、地域の空洞化や高齢化、歴史的環境の破壊が顕在化しつつあった。同時に、内陸部の出身者を中心とする労働者や経営者、従業員などが大量に鼓浪嶼に流入していった。

### 3) 観光地確立期（宿泊観光地）

2009年以降には、歴史的環境の破壊を避けるため島全体を文化遺産として強力に保護することが重要課題とされた。行政主導によって、新たに内厝澳港および三丘田港を活用することによって島内の均衡的な発展を掲げ、官民主導による歴史風貌建築の利用と開発が進められた。ここでは一般歴史風貌建築と普通住宅が修繕され、家庭旅館や商業店舗に転用されることによって、鼓浪嶼は従来の日帰り観光地から宿泊観光地に大きく転換した。観光産業は島の基幹産業となり、2015年の年間入込客数は1,021万に増加した。また外来人口は若年層の家庭旅館従業員を中心に、ニューカマーとして大量に鼓浪嶼に流入した。

以上のように、中国廈門市・鼓浪嶼における観光地化は、保養地期、観光地形成期、観光地確立期の各段階を経て進展してきた。この進展の過程では、静態的な歴史的町並みから動態的な「観光の島」へと転換し、日帰り観光地から宿泊観光地へと観光地としての性格を変化させてきたことに特色がある（図3）。

## (2) 鼓浪嶼における観光地化の進展と旧市街の地域変化

### 1) 観光地化と行政体制

改革開放以前では、さまざまな開発計画は中央政府にはば一元化され国家主導で行われていた。例えば、観光資源の所有・経営・管理権は国家に

属しており、このことは中国の行政主導型の観光マネジメント体制の特徴の1つである。政策の中心には中央集権と計画経済がおかれ、観光業の発展は軽視された。保養地期の鼓浪嶼における都市地域や観光業の発展からみれば、商工業が重視されて観光業の著しい発展に至らず、観光資源はある程度の保護がなされていたといえる。

改革開放以降において、観光業は重要視された。とくに1992年、中国では計画経済から市場経済へと転換した。政府の役割は従来の国家主導・中央集権から行政主導・地方分権に向かった。同年『第三次産業の加速発展に関する決定』が公表され、市場競争に直面する廈門市政府は、鼓浪嶼の発展のために積極的な観光開発を進めた。しかし改革開放は市場経済に過度に依存し、鼓浪嶼における粗放的な観光開発は、地域に対して経済効果のみならず、自然・社会・文化的環境へのネガティブな影響も与えてきた。

2009年以降、中国国内において観光の大衆化や産業化が進展するとともに体験型観光の需要が増加している。歴史文化街区としての指定およびUNESCO世界文化遺産への登録申請を背景に、鼓浪嶼の歴史風貌建築は、行政主導による強力な保護体制を前提として、官民主導によって観光活用されるようになった。

以上のとおり、鼓浪嶼の観光地化について行政体制の側面からみると、計画経済の一元化管理から市場経済へと変化した。推進主体は行政主導から官民主導へと変化した。歴史的環境保全は法的に保護され、観光産業の位置づけが重要視されるようになった。つまり、政府の役割は観光地化に呼応するように変化を遂げてきた。

### 2) 観光地化と土地利用・主要施設・基幹産業

改革開放以降、島嶼としての空間領域の限定性から、鼓浪嶼では近代的な工業的土地利用に限界を迎え、その結果として既存の工場が島外へ転出し、工場跡地は観光に転用された。市政府は、鼓浪嶼を観光地とする方針を打ち出し、経済特区・廈門市を後背地とした人材や資金などの生産資本を集積させ、観光地化のための基盤を整備するとともに、観光を構成する商業、宿泊業、飲食業、交通業など、さまざまな関連産業の成長を促した。ここでは都市そのものの経済成長に加えて、産業

表1 観光地化の進展とともに生じる鼓浪嶼の地域変化

地域変化		保養地期 (1949～1977年)	観光地形成期 (1978～2008年)	観光地確立期 (2009～2014年)
土地利用		居住・商工業	観光・居住	観光
主要施設		旧別荘	旧別荘	家庭旅館
		公共施設	「転出・縮小」	大型ホテル 空き地（開発予定地）
		工場	「廃業・転出」	
基幹産業		小売業・工業	小売業	宿泊業・小売業・飲食業
開発／保護		弱／一	中（政府）／弱	強（民間）／強
地域住民	転出者	管理	旧住民	旧別荘居住者
	転入者	閉鎖・制限	出稼ぎ労働者	経営者・従業員

現地調査により作成

構造の調整や転換も期待された。こうして観光業は、鼓浪嶼の主要産業に成り代わった。

また、2000年代後半以降の交通革新の進展によって、廈門市は観光拠点都市としての性格を強めることとなった。鼓浪嶼では歴史文化観光地の指定、UNESCO世界文化遺産の申請を背景に、歴史建造物の修繕およびインフラ施設の整備などが行われ、都市観光地としての魅力を高めた。また、旧別荘がとくに観光確立期において家庭旅館へ転用されるなど、急成長した宿泊業を中心として光業は鼓浪嶼の基幹産業となったのである。

以上のとおり、鼓浪嶼の観光地化の過程において、都市の地域的性格は居住地から観光地へと転換した。また、施設の利用状況の推移からは、宿泊観光地としての性格を強めており、産業構造の点からは、基幹産業が工業から観光業へと転換したと捉えられる。

### 3) 観光地化と開発／保護

旧市街地を対象とした開発／保護の側面に着目すると、改革開放以前において、観光活動のための条件と環境を備えていなかった鼓浪嶼では、都市総合計画による規制や土地所有権の問題、台湾海峡における政治的緊張などによって大規模な開発が制限され、歴史的環境は図らずも静態保存されることになったと捉えられる。

その後、歴史風貌建築の老朽化が進むとともに、観光地化にともなう開発行為によって歴史的環境が失われつつあった。また、歴史風貌建築に対する適正な保護政策がないままに地域保護政策や老

朽住宅、個人住宅への改造政策が進められ、このことは鼓浪嶼の歴史的環境の破壊につながった。しかし2000年以降、鼓浪嶼における歴史風貌建築は、法的手段による保護・開発の対象となった。また、UNESCO世界文化遺産の申請にともなって、鼓浪嶼全域が保護されるようになった。

以上のとおり、鼓浪嶼の観光地化の過程において、保護手段は保護政策が不足していた状況から法的な保護体制へと転換し、保護の強制力が強化され、保護範囲は建造物単体から地域全体へと拡大した。とくに観光地確立期においては、歴史風貌建築への規制的な保護を前提とした開発手法がとられるようになっていくことに特徴があり、その形態の代表例として家庭旅館を位置づけることができる。

### 4) 観光地化と地域住民

地域住民については、住宅制度改革や工場の転出、行政区の合併、住宅の撤去、「休眠期」政策の実施、公共施設の転出などの複合的な要因によって、大量の旧住民が島外へ流出することとなった。観光地化が生活空間に進展することにもなって、2008年までに多くの旧住民が転出を余儀なくされ、近年では所有権を持ちながら観光利用のために家を明け渡す別荘居住者も出現している。

それに対して、内陸部と沿岸部との経済格差の拡大や労働力確保の必要性、廉価な家賃などを要因として、内陸部の出稼ぎ労働者をはじめとする外来人口が引き付けられ、彼らは新住民として鼓浪嶼に流入した。さらに、家庭旅館をはじめとする観光施設の増加によって労働力の需要が拡大

し、内陸部を中心として全国各地から外来人口が大量に転入している。

こうして内陸部出身の出稼ぎ労働者のみならず若年層の外来人口を観光産業の従業者として招き入れるまでになり、彼らの構成は家庭旅館の経営者から従業員に至る階層的なものとなっている。つまり、観光地化は人口移動を加速させる役割を果たしており、現在の鼓浪嶼では転入した外部人口によって観光地運営が支えられている（表1）。

## 6. 結論

本論文から導かれた主要な結論は以下のとおりである。中国廈門市・鼓浪嶼では、観光地化の進展によって静態的な歴史的町並みから動態的な「観光の島」へと転換し、その過程において日帰り観光地から宿泊観光地へと性格を変化させてきたことに特色がある。旧市街地を特徴づける歴史風貌建築は官民による開発／保護の主要な対象となり、積極的な観光利用をとおして観光地化の進展を支え、新たな雇用の基盤となることで観光業に関連する地域住民の転出入を促進した。

本研究では中国で進展する急激な地域変化の主要な要因として観光地化を取り上げ、観光地化のプロセスと地域変化の関係性を明らかにすることを目的とした。結果として、鼓浪嶼では観光資源の立地、行政主導の政策推進、民間の積極的参画、歴史風貌建築の活用、交通拠点都市・廈門市の地理的条件など、観光地化に関わる発展条件が備わり、官民による土地・交通・産業・観光対象の開発などが展開しながら全域観光地の確立に至り、とくに2009年を境に地域には大きな変化が生じたことが明らかになった。そのなか、地域の核心的な観光資源である歴史風貌建築はとくに重要な役割を果たしてきたといえよう。

観光地化からみた鼓浪嶼の地域的特色は、①開放的な港湾都市としての地理的性格を伝統的に保持してきたこと、②観光地化を推進する地方政府の政策意図が直接的に反映したこと、③華僑など民間・個人が旧市街地の建造物を所有していたことであった。これら3つの条件は、北京旧市街、上海旧市街（外灘）、広州旧市街（沙面）などの大都市や、中国内陸部の諸都市とは異なる観光地

化の過程を鼓浪嶼にもたらした。

また本研究では、鼓浪嶼の事例を取り上げ、観光地化が中国の都市や社会問題を解決しうることを示唆した。とくに鼓浪嶼における歴史風貌建築をはじめとする地域内の建造物の観光活用にもけた取り組みは、観光地化が旧市街地における再開発の一役を担い、歴史的環境保全へと導くものであることを明らかにした。

鼓浪嶼の全域が観光地化された要因は、行政主導および民間の力で地域活性化に取り組んでいるからであると考えられる。このうちとくに、地域人口が入れ替わりながらも、観光地の形成者として、観光利用施設などの投資者や経営者、従業員の存在があったことは見逃せない。鼓浪嶼という観光地で自らの「中国の夢」を追求し、試行錯誤しながら地域と関わってきた人々の存在が、現在の鼓浪嶼を形成したのであった。■

## 【注】

- 1) 2009年に中国政府によって提示された「台湾海峡西岸経済区」の略称である。
- 2) 現地調査によって筆者が収集したデータに基づいており、実際の数はいくつよりも多いと推測される。
- 3) 鼓浪嶼の内厝澳地区に位置する場合が多く、1部屋の家賃は月額3,500元（約5.3万円）である。

## 【参考文献】

- 王涛（2006）：中国における歴史的町並み保全と観光利用。山村順次編、観光地域社会の構築—日本と世界。同文館出版。197-214。
- 王沙（2013）：天津五大道歴史文化街区保護性旅遊開発研究。陝西師範大学2013年度修士論文、65p。〔中国語〕
- 魏霞（2011）：夕日下的胡同—以北京市東城区某社区為例。中国民族大学民俗学与社会学学院2011年博士学位論文、119p。〔中国語〕
- 呉敏（2008）：広州旧城更新与保護研究—西関伝統街区与荔湾風情保護。上海同済大学建築与城市规划学院2008年度修士論文、107p。〔中国語〕
- 廈門大学編（2011）：廈門市旅遊飯店業發展白皮書。廈門市旅遊局、38-39。〔中国語〕
- 徐明前（2004）：城市的文脈—上海中心城旧住区發展方式新論。学林出版社、442p。〔中国語〕
- 張萍（2012）：上海歴史街区旅遊開發模式研究。上海師範大学旅遊学院2012年度修士論文、107p。〔中国語〕



## **Tourism Development in Old Town of Gulangyu Island, Xiamen City, China**

WU Chenfeng

This paper analyzes the development of tourism in old cities and the specific situations of regional changes in terms of time and space against the background of the development of tourist facilities in old cities caused by rapid regional changes in China. Particular attention is paid to tourist facilities reconstructed by historical buildings, so as to identify the relevance of tourist facilities and regional changes. This paper further elaborates on the influence of tourism on urban regional development; utilization of various constructions, mainly historical buildings; and the population movement within and between regions.

Gulangyu Island has developed tourist facilities including excellent tourist resources, a leading administrative role, active participation by the local residents, the unique use of historical buildings, and convenient transportation adjacent to the transport hub of Xiamen. In addition, the government and local residents gradually developed land, traffic, industry, and tourist sites until Gulangyu Island was identified as a tourist destination.

In 2009 significant changes occurred on Gulangyu Island. Along with the development of tourist facilities, Gulangyu Island has transformed from a static historical area to a dynamic "tourism island." In the process, Gulangyu Island changed from a destination for day trips to one based on accommodation. Historical buildings as the island's main tourist resource played an important role during this process. These historical buildings, which have characteristics of the old city, are the main objects for the development / protection of the government and local residents. The positive utilization of historical buildings promotes the development of tourist facilities, tourism employment, and regional population movement.

**Keywords:** development of tourist facilities, old town, "Gulangyu Homtel", Gulangyu Island, Xiamen, China